# 会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
41(4): 478-479, 1995

## 第三次国際黄海海洋科学討論会参加報告

## The Third International Symposium on the Marine Sciences of the Yellow Sea, May 28-29, 1994

**図 1.** 黄海に関するシンポジウムの1コマ

1994年5月，韓国の仁川（インチョン）にある仁荷大学校で開催された表記の海洋シンポジウムに参加した．第1回目が韓国，2回目が青島，3回目が再び韓国で開催されたこのシンポジウムは，膨大なテーマのため，海洋物理学と海洋工学，海洋化学と海洋地質学，海洋生物学と水産学の3つの部会に分かれて開催された．参加者は中国，ロシア，ベトナム，フィリピンからであったが，黄海というタイトルにもかかわらず台湾，北朝鮮からの参加者はなかった．日本からは千葉健治（東大名誉教授），永井　彰（東海大海洋研，奥様を同伴），中坊徹次（京大農学部），それに石原が参加した．韓国からの参加者が120人，韓国以外からが約70人であった．特に中国の青島の海洋研究所からは「科学1号」という調査船に乗って，多数が来韓していた．

海洋生物学と水産学の部会では32の発表があり（下記参照），内容はプランクトンから魚類まで多岐にわたっていた．中国の研究者の英語の巧みなこと，また韓国の研究者は一切原稿を持たずに英語で発表していることに驚かされた．仁川は朝鮮戦争の時にマッカーサーが上陸した場所で，宿舎の松島（ソンド）ビーチホテルの近くには上陸記念碑があった．このホテルは仁川一のホテルとのことであった．中坊さんと私は京大の院生郭さん，鄭さんの案内で，早朝の魚市場を見学したが，中坊さんはコウライスズキ，私はコモンカスベ，メガネカスベなどをそれぞれ興味深く観察することができた．レセプションは会議前夜が松島ビーチホテル，1日目は仁荷大学，2日目は「科学1号」の船内でそれぞれ開催された．いずれも料理が大量に余る程のもてなしで，「科学1号」では青島ビールの大瓶が特に目についた．

この国際会議は資金の関係で今回が最後とのことであるが，黄海を取り巻く国々がその利用に関して，政治的な駆け引きだけでなく，科学的な面での協力を維持する体制作りの場として，何らかの形でこうした会議を継続して行けないかという思いを強くした．

### 講演題目

Kim, J. Y. Distribution and migration of fisheries resources in the Yellow Sea.

Xiang, J. Chromosome manipulation in Chinese shrimp, *Penaeus chinensis.*

Jin, X. Biology and population dynamics of small yellow croaker (*Pseudosciaena polyactis*) in the Yellow Sea.

Jung, S. G. and S. Kim. The effect of the seasonal anomaly of sea water temperature and salinity on the fluctuation of the bimonthly yields of *Pseudosciaena manchuria.*

Kim, W. J. A Sino-Korean cooperative scheme for developing fisheries industry.

Cheng, Y. H. Monitoring of the stock dynamics of small yellow croaker in Lu Si fishing grounds of south Yellow Sea.

Lim, K. B. Oceanographic conditions and fishing grounds of common squid *Tadarodes pacificus* (Stennstrup), in the Yellow Sea off Korea.

Yoo, J. M., W. S. Kim and E. K. Lee. On the early life history of gunnel (*Enedrias fungi*).

Li, C. On the systematics and evolution of Chinese *Trichiurus* fishes.

Lee, Y. C., J. M. Yoo and S. Kim. On the distribution of larval fishes in the Yellow Sea.

Hong, S. Y. Distribution of the major zooplankton groups in the East China Sea in November, 1991-1992.

Zhang, H. Notes on zooplankton distribution in the Yellow Sea.

Yoo, K. I. and W. C. Lee. Marine harpacticoid copepods from west coast of Korea.

Choi, J. K., J. H. Noh and E. J. Yang. The distribution of phytoplankton and primary productivity of the Yellow Sea in the early fall.

Hong, J. S., R. H. Jung and I. S. Seo. Distribution pattern

of numerical abundance and biomass of benthic macroinvertebrates in the Yellow Sea.
Wu, Y., Y. Guo and Y. Zhang. Distribution of chlorophyll-*a* and primary production in the Yellow Sea.
Guo, Y. Characteristics of phytoplankton distribution in the Yellow Sea.
Chiba, K. Effect of aquatic animal culture on water quality in surrounding area.
Nagai, A. and S. Ono. Recent fish pathological problems in cultured eel in Japan.
Kim, S. H. Seasonal dynamics of zooplankton communities in Inchon dock, an artificially closed marine embayment facing.
Nakabo, T., T. Ueda, K. Mochizuki and U. Yamada. Taxonomic revision of east Asian sea bass, genus *Lateolabrax*.
Corrales, R. A. Harmful algal blooms in the South China Sea: Repercussions to fisheries and seafarming.
Ishihara, H. and K. Homma. Food habits of the six species of rays occurring in the Pohnpei Island, Caroline Islands.
Park, J. S. Status and prospects of Korean fisheries.
Phung, Nguyen Huu and Vo Si Tuan. The resources of commercial bivalves in Vietnam marine waters.
Qian, Z. A general picture of marine fisheries in the Mainland China.
Xu, F. Bivalve mollusca fauna of the Yellow Sea.
Liu, R. and F. Xu. Distribution of macrobenthos in the Yellow Sea.
Li, J. and J. Yang. Study on monthly changes of food consumption and ecological growth efficiency of rock fish, *Sebastoides fuscescens*.
Yang, J., M. Zhou and J. Li. Experiments on energy flow of a simple food chain.
Jiao, N. Size-fractionated kinetics of nitrogen uptake by natural population of marine microplankton.

（石原　元　Hajime Ishihara：〒215 川崎市麻生区上麻生 2-30-8　水土舎）

---

魚類学雑誌
41(4): 479-480, 1995

## 魚類自然史研究会の紹介

## Group for the Studies of Natural History of Fishes

魚類自然史研究会は主に淡水に生息する魚類やその他の生物の分類や生態などに関する情報の交換を目的とした研究会である．本研究会の前身は，1975年から開始した「魚集会」である．私も含めて関西の魚類研究の初心者が始めたために「雑魚（ざこ）の会」という名称も自他ともに認めていた．持ち回りで研究会の手配をし，勉強会の終了後近くの安い店で魚等談議で再度勉強する．会員の博士号取得，就職，結婚などを肴にした祝賀会に変わったこともある，想い出深い温かい会である．この会は5年ほど続いた．そしてブランクの後，1985年秋の最後の「魚集会」を滋賀県立琵琶湖文化館で行った．この時，新潟県から広島県までの地域から約50名の参加者があり驚いた記憶がある．現在の「魚類自然史研究会」は1986年3月京都大学農学部で開催された研究会において改名された．その後春1日・秋1泊2日というペースで続けられ，1994年度からは2回とも1泊ということになっている．これまでの開催地も岐阜県から岡山県までの大学，博物館，高等学校，水族館・水産試験場・保養施設など雑多である．約50名が宿泊するのでその情報量は莫大なものがある．参加者は大学や博物館・水族館の主に若い研究者・学生のみならず教師，水産研究所員，プロカメラマン，芸術家，自然愛好・研究家などこれまた多様である．現役を退かれた有名な研究者もひょっこりおいでになって，これまた有益かつ励まされる場面もある．多様性と共生を旨としており，何か魅力があってつい参加してしまう研究会らしい．

1994年はまず琵琶湖文化館（3月19～20日）で来日間もないカナダ・Guelf大学のDr. E. K. Balonさんも参加して行われた．そして秋10月15～16日には京都府北山山中の府立ゼミナールハウスに閉じこもって次のような研究発表を聴いた．1) ハリヨの卵食いと繁殖成功，2) ドンコの巣へのムギツクの産卵，3) 琵琶湖に出現したコイ，フナ属仔稚魚，4) 淡水二枚貝のアイソザイム分析，5) コイ科雑食性魚類の消化管充満度及びメニューにおける「ばらつき」―オイカワとカワムツを中心にして―，6) ドブガイ二型の有効積算温度則，7) スゴモロコとデメモロコの中間雑種，8) ミナミヌマエビの生き残り戦略，（フィルムナイト：9）アジアアロワナの繁殖行動，10) ウスリ―河の乙女)，11) ネコギギの個体群動態と生活史，12) ホトケドジョウ学のすすめ，13) バラタナゴ雌性発生魚の性比について，　14)　4倍体性ヤマトシマドジョウの母系，15) バラタナゴの繁殖形態の変動とその要因について，16) ハリヨの卵食い，スニーカー，卵ドロボー，17) サンゴ礁におけるクマノミの宿主間移動と未成魚の雌雄同体性，18) タンガニーカ湖ランプログス・プルチャーの生息場所，19) イワトコナマズの産卵．懇親会では，本会の参加が引き金となって研究を進め，ついに博士号を取得された高等学校の先生の祝賀会も兼ねた．次回の第20回魚類自然史研究会は1995年3月4～5日，鳥羽水族館で開催されることになっている．

なお，本会に対する問い合わせは　〒582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1　大阪教育大学教育学部生物学教室長田芳和，電話 (0729) 76-3211（内線 3213），Fax (0729) 76-3269 まで．

（長田芳和　Yoshikazu Nagata：〒582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1　大阪教育大学教育学部生物学教室）

---

魚類学雑誌
41(4): 480, 1995

## 進化生物学メイリングリスト "EVOLVE" の紹介
## On the New Mailing List (ML), "EVOLVE"

ファックスの便利さに感動していたのはつい昨日，と思っていたらあっという間に Internet を利用した電子メイルの時代になってしまった．そして，ようやく電子メイルを便利に使えるようになったと思ったら，今度は ML（メイリングリスト）だ，WWW（ワールド・ワイド・ウェブ）だ，はたまた anonymous ftp (?) など，わけのわからぬ言葉を耳にするようになってきた．コンピュータとそれを用いた通信の世界の進歩には驚くべきものがあり，私も含めて多くの人がよく理解しないままにこの世界のことを書いているが，すでに想像を超える量の情報がこのネットワーク上を飛び交っていることだけは確かである．

もっとも，このような情報の洪水は，学生や若手研究者にとって有益でない場合が多いと私は信じている．能書きばかりが先行し，自然を観る目をどんどん奪ってしまうからである．一方，もはや若手と呼ばれなくなった研究者が研究を趣味でなく仕事として続けていくためには，つねに刺激が必要である．新潟大の粕谷英一氏が「"田舎" で生き延びる方法」(SHINKA, 4 [4]: 97-100) という一文でいみじくも述べているように，よそから隔絶した世界をつくらぬためにも，電子メイルは万難を排してでも使えるようにしておくべきものであろう．

その電子メイルを利用した進化生物学の双方向の情報基地ともいえるのが，今回紹介する進化生物学メイリングリスト "EVOLVE" である．発足は昨年9月1日，リストオーナーは農林水産省農業技術研究所の三中信宏氏，農林水産研究計算センター（つくば市）にあるメイルサーバー上に設けられた．

そもそもメイリングリスト（以下 ML と略す）とは何なのか，素人なりに説明してみたい．通常の電子メイルはメイルの1対1のやりとりを目的としているが，ML のアドレスに送られてくる電子メイルは，参加者として登録しているメンバー全員に送られる．メイルの内容は学会やシンポジウムや公募の案内であったり，新刊本やソフトの情報であったりする．こうした情報的な内容に加えて，問題提起をしてメンバーの意見をつのったり，自分で解決できない研究上の問題点を質問としてメイルで送ることもできる．こうした情報や問題提起や質問を読んだメンバーからは，たいていの場合，ML を通じて，あるいは個人的に何らかのレスポンスがある．したがって，メンバーの手元には，他人に読まれることを前提としたメイルが毎日のように送られてくるようになる．EVOLVE の場合，開設4カ月半で300台半ばのメイルが来ているので，1日平均，数通の進化学関係のメイルがメンバーに対して送られていることになる．また，議論が白熱すると，1日で10通を超えるメイルがやりとりされることもある．

もちろん，進化生物学といっても，系統分類学をはじめとして，分子進化学，進化生態学，生物哲学等を含む大きなものであるから，人によっては不必要な情報も多数ある．ところが，案外そんな不必要な情報と思われるものの中にも，刺激として考えるのなら有効なものも数多くある．いずれにせよ，進化学に関心をもつ魚類研究者は，電子メイルを使える環境が整っていさえすれば，下記のリストオーナー宛てに入会したい旨，メイルを送ることにより，すぐにこの新たな世界を経験することができるようになる．現在，魚類学会からも数人の会員がメンバーとなっているが，まだまだその数は少ない．一人でも多くの方がこのメイリングリストに参加し，進化学に関する議論を盛り上げてくれることを願う次第である．なお，魚類関係では，最近海外で "Fish Ecology" というメイリングリストが開設された．私も知人を通じてその案内文をもってはいるが，どなたかすでにメンバーになっており詳細についてご存じであれば，この欄でご紹介願いたい．

リストオーナー
三中信宏 (Nobuhiro Minaka)
農林水産省農業環境技術研究所・計測情報科
〒305 茨城県つくば市観音台 3-1-1
TEL (0298) 38-8222（直通）
FAX (0298) 38-8199
E-mail: minaka@niaes.affrc.go.jp

（宮　正樹　Masaki Miya：〒260 千葉市中央区青葉町955-2　千葉県立中央博物館動物学研究科）